

広義全称表現における2つのタイプ

—全否定を表す「まったく」と「ぜんぜん」を中心に—

大塚 貴史

1. はじめに

一般に、現代日本語の副詞「まったく」「ぜんぜん」を含む次のような文は、共に全否定を表すとされる^{注1}。

- (1) (証人喚問) そういう事実はまったくありません。^{注2}
(飛田・浅田1994: 507 (下線は筆者))
- (2) 教授の講義はむずかしすぎてぜんぜんわからない。
(飛田・浅田1994: 218 (下線は筆者))

しかし、一部の先行研究でも指摘されているように、両副詞は常に置き換えが可能で、読みの幅が一致するというわけではない。

- (3) 昨日の試合には観客がまったくいなかった。
(4) 昨日の試合には観客がぜんぜんいなかった。
(5) a. 「観客が皆無であった」という読み
b. 「観客が少ししかいなかった(少数はいた)」という読み

例えば、「まったく」を含む(3)は(5a)のようには読めるが、(5b)のようには読みにくい。これに対し、「ぜんぜん」を含む(4)は(5a)(5b)いずれの読みも容認される。

本稿では、こうした「まったく」と「ぜんぜん」の違いが、前者が〈差分(ここでは肯定部分)が皆無である〉ということを示すタイプ、後者が〈(基準から見て)程度が甚大である〉ということを示すタイプであることに起因する、と主張する。また、この差が先行研究でも扱われている「だけ」と「ばかり」の違いなどとも共通し、全否定や限定などを含めた広義の全称表現のタイプ分けに寄与することを示す。

2. 先行研究

「まったく」と「ぜんぜん」については、特に後者を扱った先行研究が数多く存在するが、ここでは両副詞の相違点に言及した2つの先行研究を取り上げる。1つは読みの幅が必ずしも一致しないことを示した研究、もう1つは共起述語の傾向に差が見られる

ことを示した研究である^{注3}。

2. 1 読みの幅が必ずしも一致しないことを示した研究

まず、「まったく」と「ぜんぜん」の読みの幅が必ずしも一致しないことを示した研究として、武内（2015）の指摘を概観する。武内（2015）は、次の（6）は「どこを見渡しても雪が完全に積っていない状態」（武内2015：182）でなければ許容されないが、（7）は「2メートルの積雪を見ながらの発話」（武内2015：182）としても適切であると述べる。

（6）今年は当地ではまったく雪が降らない。（武内2015：181（下線は筆者））

（7）今年は当地ではぜんぜん雪が降らない。（武内2015：182（下線は筆者））

これは、「ぜんぜん」は否定述語が表す状態が不完全な場合（肯定的事態の実現が少なくとも部分的に認められる場合）でも用いられることがあり、その点において「まったく」とは異なるということを示している。武内（2015）はその要因について、「まったく」は「表出命題そのものとかかわる」（武内2015：182）ものであり、「事象Pの否定（-P）を強める」（武内2015：183）働きを持つものに対し、「ぜんぜん」は「否定的態度の表明とかかわる」（武内2015：182）ものであり、「事象Pの否定ではなく、Pと思わないと訴える」（武内2015：183）働きを持つことによると指摘している。武内（2015）は、これを次のように定式化する。

（8）[まったく [P] ない] （武内2015：184）

（9）ぜんぜん [[P] と思う] ない （武内2015：184）

つまり武内（2015）は、（7）は、話者が「雪が降っているとは思わない」と「訴える」ものであるため、実際には「雪が降る」という事態が生じていたとしても許容されると主張するのである^{注4}。

2. 2 共起述語の傾向に差が見られることを示した研究

次に、「まったく」と「ぜんぜん」で共起述語の傾向に差が見られることを示した研究として、朴（2016）の指摘を概観する。朴（2016）は、小説や「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（以下「BCCWJ」）を用い、「まったく」「ぜんぜん」と否定形式（文法的否定形式・語彙的否定形式^{注5}）の述語の共起関係を調査している^{注6}。その調査を踏まえ、朴（2016）は、工藤（2000）の言う「不一致」系の語彙的否定形式に当たる「反対だ」「逆だ」は「まったく」とのみ共起すると述べる^{注7}。例えば、（10）の「まったく」は「『ぜんぜん』に置き換えられない」（朴2016：50）と述べている。

- (10) a. 意外なのは、ただ部落の広さだけではなかった。道が次第に上り坂になっていく。これはまったく予期に反したことだった。

(朴2016：51／安部公房『砂の女』(下線は筆者))

- b. 当然、謝罪と承諾の返事があるものと思っていた。しかし、耳をうたがうような、まったく逆な答があった。

(朴2016：51／星新一『人民は弱し官吏は強し』(下線は筆者))

- (10') a. *これはぜんぜん予期に反したことだった。

- b. *しかし、耳をうたがうような、ぜんぜん逆な答があった。

また、「気にしない」系の語彙的否定形式に当たる「いい」は「ぜんぜん」とのみ共起すると指摘している。

- (11) 「本当にせっかくのいい気分のおきに、すみませんでした……」「いや、そんなのはぜんぜんいいんです」と、ぼくは言った。

(朴2016：51／椎名誠『新橋烏森口青春篇』(下線は筆者))

- (11') *いや、そんなのはまったくいいんです。^{注8}

2. 3 問題の所在

武内(2015)の主張(2. 1節)は、一見「まったく」と「ぜんぜん」の読みの幅が必ずしも一致しないことの説明として妥当なものであるように思われる。しかし、両副詞が共起可能な述語の傾向が異なること(2. 2節)との対応関係が判然としないことに鑑みると、その主張によって両副詞の違いが十分に捉えられているとは言えない。その点を踏まえ、以下ではまず現象に即して両副詞の違いを検討する。

3. 「まったく」と「ぜんぜん」の相違点

3. 1 現象観察

(12)のような場合、「まったく」と「ぜんぜん」は相互に置き換えが可能であり、いずれも全否定を表していると考えられる。

- (12) a. あの小説は {まったく／ぜんぜん} 面白くない。

- b. この店のコーヒーは {まったく／ぜんぜん} 苦くない。

しかし、両副詞は常に相互に置き換えが可能なわけではない。例えば、(13)のような場合は「ぜんぜん」が問題なく許容されるのに対し、「まったく」の許容度は低い。

- (13) a. うちの子は中学生にしては {?? まったく／ぜんぜん} 大きくない。

b. この運動公園のプールは {?? まったく / ぜんぜん} 深くない。

(12) と (13) では否定述語の性質が異なる。前者の述語「面白くない」「苦くない」は、「面白い」「苦い」という肯定的要素が存在しない、すなわち〈肯定部分が皆無である〉という解釈(〈面白さが0〉〈苦さが0〉)が可能である。これに対し、後者の述語「大きくない」「深くない」は、「大きい」「深い」という肯定的要素が存在しないという解釈(〈大きさが0〉〈深さが0〉)は想定しにくい。寧ろ、ここで問題となっているのは「大きさ」「深さ」の程度である。

3. 2 差分言及型と程度甚大型

(12) と (13) の否定述語の性質の違いと、「まったく」と「ぜんぜん」の許容度の違いを重ねると、両副詞の相違点が明らかになる。まず、「まったく」は(12)の述語と共起しやすく、(13)の述語とは共起しにくいということを踏まえると、「まったく」は〈肯定部分が皆無である〉ということを表すのに適した副詞であると言える。以下ではこの場合の肯定部分のことを「差分」と呼び、その差分が皆無であることに言及する「まったく」のようなタイプを「差分言及型」と呼称する^{注9}。

これに対し、(13)の述語と共起しやすい「ぜんぜん」は、程度を問題にする文に適した副詞であると言える。そのような文において、「ぜんぜん」は〈程度が甚大である〉ということを表す働きがある。例えば(13)の場合、「ぜんぜん」を用いることで「大きくない」「深くない」の程度の甚大さが表される。このように〈程度が甚大である〉ということを表す「ぜんぜん」のようなタイプを、ここでは「程度甚大型」と呼称する。「ぜんぜん」が程度甚大型であることは、(14)のように〈差分(肯定部分)が皆無である〉ということが強調される文脈では「ぜんぜん」の許容度がやや下がるという現象によっても示唆される。

(14) この世に死なない人間など {まったく / ? ぜんぜん} いないはずだ。

ところで、(12)のような場合は「まったく」と「ぜんぜん」が相互に置き換えられ、いずれの副詞を用いても全否定、いわば広義の全称を表していると解釈された。

(12) a. あの小説は {まったく / ぜんぜん} 面白くない。 (再掲)

b. この店のコーヒーは {まったく / ぜんぜん} 苦くない。 (再掲)

そのため、差分言及型の「まったく」も程度甚大型の「ぜんぜん」も、広義の全称を指向する点では共通していると考えられる。つまり、「まったく」は〈差分が皆無である〉ということを以って、「ぜんぜん」は〈程度が甚大である〉ということを以って全称を指向する働きを持つのである。

3. 3 読みの幅の不一致について

前掲の(3)(4)(5)で確認した現象、すなわち「まったく」と「ぜんぜん」の読みの幅が一致しないという現象は、両副詞がそれぞれ前述のような働きを持つことに起因していると考えられる。

1節で見たように、「まったく」を含む(3)は(5a)のように読めるが、(5b)のように読みにくい。一方で、「ぜんぜん」を含む(4)は(5a)(5b)いずれの読みも容認される。

- (3) 昨日の試合には観客がまったくいなかった。 (再掲)
(4) 昨日の試合には観客がぜんぜんいなかった。 (再掲)
(5) a. 「観客が皆無であった」という読み (再掲)
b. 「観客が少ししかいなかった(少数はいた)」という読み (再掲)

まず、「まったく」は〈差分が皆無である〉ということを表すため、(3)は〈観客が0〉ということを示す。したがって多少なりとも差分(「観客がいる」)が介入する余地はなく、(5b)の読みは生じにくい。一方、「ぜんぜん」は〈程度が甚大である〉ということを表すため、(4)は〈「いない」の程度が甚大〉ということを示す^{註10}。このとき、差分が0であるか否かまでは問題にされていない。したがって差分が介入する余地があるため、(5b)のように読めるのである。ただし、「ぜんぜん」も「まったく」と同様に全称を指向するものであるため、(5a)のような読みも可能である。

3. 4 共起述語の傾向差について

また、「まったく」を差分管及型、「ぜんぜん」を程度甚大型と分析することにより、朴(2016)が指摘した両副詞の共起述語の傾向差についても説明を与えることができる。

3. 4. 1 「まったく」とのみ共起するもの

2. 2節で見たように、朴(2016)によれば、「不一致」系の語彙的否定形式に当たる「反対だ」「逆だ」は「ぜんぜん」とは共起せず、「まったく」とのみ共起する。

- (10) a. 意外なのは、ただ部落の広さだけではなかった。道が次第に上り坂になっていく。これはまったく予期に反したことだった。 (再掲)
b. 当然、謝罪と承諾の返事があるものと思っていた。しかし、耳をうたがうような、まったく逆な答があった。 (再掲)
(10') a. *これはぜんぜん予期に反したことだった。 (再掲)
b. *しかし、耳をうたがうような、ぜんぜん逆な答があった。 (再掲)

この「反対だ」「逆だ」は、いわゆる程度副詞による修飾を受けにくいという特徴を持

つ点で共通する。

- (15) a. 私の意見は彼とは { ϕ / ?? 非常に / ?? 少し} 反対だ。
b. 私の意見は彼とは { ϕ / ?? 非常に / ?? 少し} 逆だ。

程度副詞による修飾を受けにくいものに関し、仁田 (2002) は次のように述べている。

- (16) 極限に位置する属性(質) —たとえば「真ッ暗ダ」—や度合いを持たない点(極)において成り立つ関係 —たとえば「等シイ」—などは、「?? 非常に真ッ暗ダ」や「*少し等シイ」のように、通例の程度の副詞による修飾や限定を受けない。
(仁田2002: 196)

程度副詞による修飾を受けにくい「反対だ」「逆だ」は、仁田 (2002) の言う「度合いを持たない点(極)において成り立つ関係」を示すものに当たると考えられる^{注11}。こうした特徴を持つ「反対だ」「逆だ」が「まったく」による修飾を受けると、「反対」あるいは「逆」でない部分(差分)が皆無であることが明示的に表されることとなる。これに対し、程度甚大型の「ぜんぜん」は対象の程度性(度合い)を問題とするが、「反対だ」「逆だ」は「度合いを持たない」ため、「ぜんぜん」とは共起しにくいのである。

3. 4. 2 「ぜんぜん」とのみ共起するもの

一方、「気にしない」系の語彙的否定形式に当たる「いい」は、「まったく」とは共起せず、「ぜんぜん」とのみ共起すると指摘されている。

- (11) 「本当にせっかくのいい気分のおかげに、すみませんでした……」「いや、そんなのはぜんぜんいいんです」と、ぼくは言った。(再掲)
(11') *いや、そんなのはまったくいいんです。(再掲)

語彙的否定形式の「いい」は程度副詞による修飾を受けにくいため、一見すると程度甚大型の「ぜんぜん」とは親和性が低いように思われる。しかし、この場合は「いい」が用いられる文脈に支えられて「ぜんぜん」との共起が可能になっていると考えられる。

先行研究では、主に肯定表現と共起する「ぜんぜん」について考察する中で、「ぜんぜん」は「想定」「予想」「前提」などが存在する文脈で用いられやすいということが指摘されている(足立1990; 野田2000; 有光2002; 尾谷2008; 新野2011等)。

- (17) 【料理を食べて、「まずいでしょう?」と言われた際の返答として】
「これ、全然美味しいよ。」(尾谷2008: 106)
(18) 【先行文脈がなく、会話の第一声として】

例えば、(17) では「ぜんぜん」を含む文が発話されるにあたり「料理がまずい」という「想定」が存在しているのに対し、(18) にはそうした「想定」は存在しない。この場合、「ぜんぜん」は(17) においてのみ許容される。

語彙的否定形式の「いい」が用いられる(11) にも、「いい気分を害した」といったような「想定」が存在しており、「ぜんぜん」の許容度の高さはこの点に起因していると考えられる。そして、このことは「ぜんぜん」が程度甚大型であることと無関係ではない。〈程度が甚大である〉ということを表すということは、言い換えれば、当該の対象の状態が何らかの「基準」に照らして大幅に乖離していることを表すということである。(11) のような場合は、「いい気分を害した」という「想定」を「基準」に据えたとき、実際はその「基準」から大幅に乖離した状態にあるということが「ぜんぜん」によって表されているのである。つまり、語彙的否定形式の「いい」は、それ自体が程度性を持つわけではないものの、「いい」が用いられる文脈における「基準」の存在によって程度甚大型の「ぜんぜん」と共起しやすくなっているのである。一方、「まったく」はあくまで〈差分が皆無である〉ということを表すものであり、何らかの「基準」に照らした判断(「基準」からの離れ具合など)に関わるものではない。そのため、「まったく」は語彙的否定形式の「いい」とは共起しにくいのである。

4. 広義全称表現のタイプ分け

4. 1 「まったく」「ぜんぜん」と「だけ」「ばかり」の共通性

以上、「まったく」と「ぜんぜん」が共に広義の全称を指向しながらもタイプを違える副詞であることを論じてきたが、このように捉えることの重要性は、佐藤(2017)で指摘されるような「だけ」と「ばかり」の差との共通性を捉えられるところにある。

佐藤(2017)は、「だけ」「ばかり」は「母語話者が、ある集合の全要素が該当することを表すという直観をもっている」(佐藤2017: 3)にもかかわらず、「ばかり」は非該当例を許容することがあるとする^{注12}。例えば、(19) のような場合がこれに当たる。

(19) (月曜日から土曜日はビールを飲み、日曜日はワインを飲んだ場合)

先週はビール {ばかり/*だけ} 飲んだ。 (佐藤2017: 6 (下線は筆者))

(19) は、飲んだものがビールに限られない場面でも「ビールばかり飲んだ」という発話が可能であることを示す。一方、同様の場面で「だけ」の使用は許されない。佐藤(2017)は、この要因を集合形成プロセスの違いに求めており、「ばかり」は主体にとって非常に捉えられやすい事態のみから成る主観的な集合を形成すると述べている。佐藤(2017)は、この主体にとっての捉えられやすさを「認識的際立ち性」と呼び、その認識的際立ち性を持たない事態はそもそも集合の成員とならないとする。そのため、非該

当例が存在していても「ばかり」を用いることができると言うのである。

この「ばかり」に関する現象は、広義の全称表現が「そうでないものや事態」の存在が認められる場面でも用いることができる、という点で「ぜんぜん」と共通している。また、基本的には「ばかり」と意味の差がないにも関わらず、「だけ」はそのような場面での使用が認められない、という点も「まったく」と「ぜんぜん」の関係と共通している。これは、「だけ」と「ばかり」の差が「まったく」と「ぜんぜん」の差と並行的に捉えられることを示唆している。つまり、佐藤（2017）は非該当例の存在を許容する「ばかり」について、認識の際立ち性を持つ事態に対して用いられる、と特徴づけているが、「ぜんぜん」との共通性を勘案すれば、「ばかり」が有するこの認識の際立ちという特徴は、〈主観的でもあり得る〉基準に照らした程度（ここでは頻度）の甚大さとして包括的に捉え直すことが可能である。

4. 2 比較文における許容度

また、「まったく」「ぜんぜん」と「だけ」「ばかり」は、比較を含意する文（以下「比較文」）での許容度に差がある点でも共通している。例えば、「まったく」と「ぜんぜん」をいずれも用いることが可能であった前掲の（12）を比較文にすると、「まったく」の許容度が下がる。

- (12) a. あの小説は {まったく／ぜんぜん} 面白くない。 (再掲)
b. この店のコーヒーは {まったく／ぜんぜん} 苦くない。 (再掲)
- (20) a. あの小説はこの小説より {??まったく／ぜんぜん} 面白くない。
b. この店の珈琲は市販品と比べて {??まったく／ぜんぜん} 苦くない。

また、「だけ」と「ばかり」においても同様の差が観察される。BCCWJから収集した「ばかり」の用例には比較文であるものが複数観察されるのに対し^{注13}、「だけ」の用例にはそうした例は観察されず、(21)の「ばかり」を「だけ」に置き換えた文の許容度も低いと言える。

- (21) a. われわれの若かった頃は、[筆者略] 技術とか知識よりも感性とかセンスばかりが重要視されてましたよね。 (玉木正之『天職人』)
b. それからというもの、未来のことより過去のことばかりが気になり始めたのです。 (『俳句研究』2005年12月号)
c. 今1歳4ヶ月、まだまだ大変ですが、低月齢の頃を振り返ると不思議と大変さより楽しかったことばかり思い出されます。(Yahoo!知恵袋 2005年)
- (21') a. ?? 技術とか知識よりも感性とかセンス だけが重要視されてましたよね。
b. ?? 未来のことより過去のこと だけが気になり始めたのです。
c. ?? 大変さより楽しかったこと だけ思い出されます。

こうした現象も、「まったく」と「ぜんぜん」、「だけ」と「ばかり」がそれぞれ差分言及・程度甚大というタイプに分かれることについて示唆的である。比較について、森山(2004: 32)は「複数の要素について、特定の共通する属性の程度から位置づける表現」であるとす。つまり、比較文とは程度性を問題とする文であり、その点において程度甚大型である「ぜんぜん」や「ばかり」は問題なく許容される。しかし、差分言及型の「まったく」や「だけ」は差分の非存在を表す形式であり、そこに程度性は関与しない。そのため、「まったく」や「だけ」は比較文では用いにくいのである^{注14}。

5. おわりに

以上の議論をまとめると次のようになる。第1に、「まったく」と「ぜんぜん」の読みの幅が必ずしも一致しないこと、また、共起述語の傾向に差が見られることを改めて確認した上で、その差が、「まったく」が〈差分(ここでは肯定部分)が皆無である〉ということを示すタイプ(差分言及型)、「ぜんぜん」が〈(基準から見て)程度が甚大である〉ということを示すタイプ(程度甚大型)であることに起因する、と主張した。第2に、「まったく」と「ぜんぜん」の違いが「だけ」と「ばかり」の違いと並行的に捉えられることから、差分言及・程度甚大というタイプ分けが、全否定や限定を含めた広義の全称表現のタイプ分けに寄与することを示した。

しかし、本稿で扱った表現は「広義全称表現」と言えるものの一部に過ぎない。全否定を表すものに限っても、「まったく」「ぜんぜん」の他に「まるで」「ひとりも」「だれも」など様々なものがある。今後、これらについても差分言及・程度甚大というタイプに分けることが可能なのか、あるいはこれらとはまた異なるタイプに属すると見るべきなのか検証する必要がある。

注

- 1 飛田・浅田(1994)は、「まったく」に関して(i)のように、「ぜんぜん」に関して(ii)のように述べる。
(i) 程度が非常にはなはだしいことを誇張する様子を表す。〔筆者略〕打消しや否定を誇張する場合には、肯定の可能性が完全に存在しないことを表す。(飛田・浅田1994: 507-508(下線は筆者))
(ii) 程度が非常にはなはだしいことを誇張する様子を表す。〔筆者略〕打消しや否定を誇張する場合には、肯定の可能性がまったくないことを表す。(飛田・浅田1994: 219(下線は筆者))
また、坂口(1999: 12)は「まったく」と「ぜんぜん」の意味用法について、「否定形式と共起した場合、『一度として』や『いっさい』などと同様、『皆無である』という属性を表す役割を持っている」とする。さらに、朴(2016: 41)は「まったく」「ぜんぜん」について、「完全否定を表すという点において互いに類似している」と述べている。
- 2 文献から引用、あるいはコーパスから収集した例文などには、末尾にその出典を記す(出典が明記されていないものは筆者の作例)。
- 3 「まったく」と「ぜんぜん」を比較した研究には、両副詞の用法の変遷に注目したものもある(鈴木1996等)。
- 4 尾谷(2008)も、否定述語が表す状態が不完全な場合でも「ぜんぜん」が用いられ得ることを示している。尾谷(2008: 105)は、(iii)は「先生の発言をある程度聞いていた場合」でも用いることができ、(iv)は「1%も理解できていないという解釈には限られない」と述べている。

- (iii) 彼は先生の話を全然聞いてない。(尾谷2008: 105 (下線は筆者))
- (iv) お前はこの仕事の重要性が全然分かってない。(尾谷2008: 105 (下線は筆者))
- ただし、その要因を「ルース・トーク (loose talk)」に求める点で武内 (2015) とは異なる。尾谷 (2008) は、「発話者の思考と発話内容が常に100%一致しているわけではな」(尾谷2008: 104) い、という関連性理論の考えに基づき、「ぜんぜん」は本来十全性を持つものの、(iii) (iv) はそれが厳密には問われない文脈であるために「誇張表現としてルースに使用できる」(尾谷2008: 105) と主張する。しかし、全否定を表す (十全性を持つ) という点で「ぜんぜん」と共通する「まったく」については、武内 (2015) が指摘する通り、否定述語が表す状態が不完全な場合には用いにくい。こうした「まったく」との差に鑑みれば、「ぜんぜん」の振る舞いは「ルース・トーク (loose talk)」のみでは必ずしも十分に説明しきれないと考える。
- 5 一般に、「ない」が含まれる「来ない」「寒くない」「親切ではない」「学生ではない」などは「文法的否定形式」と呼ばれる。これに対し、「ない」は含まれないものの、語彙自体に否定的意味を有する「不可能だ」「無理だ」「駄目だ」「違う」などは「語彙的否定形式」と呼ばれる。特に後者については、工藤 (2000) が「不可能」「困難」「欠如・消滅」「不一致」「負の評価」「気にしない」といったタイプに下位分類している。それぞれのタイプの所属語彙などの詳細は工藤 (2000) を参照されたい。
 - 6 朴 (2016) は、「まったく」「ぜんぜん」の他に「まるで」の共起述語の傾向についても調査している。
 - 7 朴 (2016) は、調査において共起例が「3例以上見られたもの」(朴2016: 54) について共起可能と判断している。
 - 8 朴 (2016: 51) は、収集した用例において、「『まったく』が、〈気にしない〉という意味での『いい』と共起している例は見られない」と述べており、本稿 (11) の「ぜんぜん」が「まったく」に置き換えられない、あるいは本稿 (11') のような文が不自然と明言しているわけではないが、ここでは便宜的に「*」を付した。
 - 9 本稿での考察対象には含めていないが、全否定を表す表現には「ひとつも (～ない)」「ひとりも (～ない)」など、明示的に差分に言及しているものと捉えられるものがある。現段階ではそうした表現と「まったく」を一括して「差方言型」と考えるが、今後考察を深めていく中でこれらを区別することになる可能性もある。
 - 10 「いない」は「非存在」を表すものであり、狭義の程度性には該当しないが、「(存在)量」と捉えれば広義には一種の程度性を持つと考えることが可能である。程度と量の連続性については仁田 (2002) を参照されたい。
 - 11 工藤 (1983: 179) は、形容詞 (いわゆる形容動詞を含む) には「相対性」を持つ「線的な」形容詞と「相対性」を持たない「点的な」形容詞があり、「一般の程度副詞は〔筆者略〕相対性を (通常は) もたない形容詞とは共起しにく」いと述べている。これに鑑みれば、「反対だ」「逆だ」は「相対性」を持たない「点的な」形容詞と言える。
 - 12 同様の指摘は菊池 (1983)、定延 (2001)、澤田 (2007) などでもなされている。
 - 13 BCCWJから収集した「ばかり」の用例のうち、比較文と考えられるものは30例観察された。なお、用例の検索にはコーパス検索アプリケーション「中納言」を使用した。
 - 14 肯定文における「ぜんぜん」については、比較の表現と共起する場合に許容度が高くなるのが野田 (2000) や尾谷 (2008) によって指摘されている。一方で「まったく」については、肯定文・否定文を問わず比較の表現との共起に関して指摘した研究は管見の限り見られない。

参考文献

- 足立広子 (1990) 「副詞「全然」の用法について」『南山国文論集』14
- 有光奈美 (2002) 「否定的文脈と否定極性項目に関する一考察—“not at all” vs. 「全然」を中心に—」『言語科学論集』8
- 尾谷昌則 (2008) 「アマルガム構文としての『「全然」+肯定』に関する語用論的分析」児玉一宏・小山哲春 (編) 『言葉と認知のメカニズム—山梨正明教授選暦記念論文集—』ひつじ書房
- 菊地康人 (1983) 「バカリ・ダケ」国広哲弥 (編) 『意味分析』東京大学文学部
- 工藤浩 (1983) 「程度副詞をめぐって」渡辺実 (編) 『副用語の研究』明治書院
- 工藤真由美 (2000) 「否定の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子『時・否定と取り立て』(日本語の文法

2) 岩波書店

- 坂口昌子 (1999) 「否定形式との関係からみた程度副詞の体系」国語語彙史研究会 (編) 『国語語彙史の研究』 18
- 定延利之 (2001) 「探索と現代日本語の「だけ」「しか」「ばかり」」『日本語文法』 1-1
- 佐藤琢三 (2017) 「〈全該当〉を表す語の主観性—取りたて助詞「ばかり」を中心に—」『国語と国文学』 94-3
- 澤田美恵子 (2007) 「第2章 限定に関わる「とりたて助詞」」『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』くろしお出版
- 鈴木英夫 (1996) 「「全く」の用法の推移と副詞としての特性について」山口明徳教授還暦記念会 (編) 『山口明徳教授還暦記念国語学論集』 明治書院
- 武内道子 (2015) 「第9章 表出命題態度への制約〈ぜんぜん〉」『手続きの意味論—談話連結語の意味論と語用論—』ひつじ書房
- 新野直哉 (2011) 「現代日本語における進行中の変化の研究—「誤用」「気づかない変化」を中心に—」ひつじ書房
- 仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』(新日本語文法選書3) くろしお出版
- 野田春美 (2000) 「「ぜんぜん」と肯定形の共起」『計量国語学』 22-5
- 朴秀娟 (2016) 「完全否定を表す副詞「まるで」「ぜんぜん」「まったく」に関する一考察」『神戸大学留学生センター紀要』 22
- 飛田良文・浅田秀子 (1994) 『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 森山卓郎 (2004) 「日本語における比較の形式」『言語』 33-10

参考資料

国立国語研究所「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(Ver. 1.1) [最終確認日: 2020年2月25日]

付記

本稿は、第160回関東日本語談話会 (於: 学習院女子大学)、及び日本語文法学会第19回大会 (於: 立命館大学) における口頭発表に加筆・修正を施したものである。発表に際し、貴重なご意見を賜った方々に感謝申し上げる。

(おおつか たかし 筑波大学大学院 博士課程 人文社会科学研究科)